

第10回 『平治物語』

次の文章は、夫(源氏の総大将)を戦で亡くした常葉御前が、子どもを連れて逃げのびようとしている場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

黄昏時も過ぎぬれば、行き交ふ人も跡絶えて、所々に見えし家も、扉を閉ぢて心細し。里の煙も絶えぬれば、宿借らばやのあらましだにも今はなし。夜も更け行けば風荒く雪降りて、子どもも我が身も、明日を待つべき命とも覚えず。「あはれ、人品も見知らざらん山里人の、草の庵もがな。今宵ばかり身をも隠して、子どもを助けむ」と思ひ居たり。幼き者どもも泣き弱りて、声も時々絶え、息も絶え入るやうに聞こゆれば、「かくても助からはこそあらめ、とても長らふまじき身なれば、人里に宿を借りてこそ、もしや、頼みもあらむずれ」と思ひなして、焚く火の影の見えけるを頼みて、おづおづ近付きて、竹の編戸を打ち叩く。主と覚しくて、おとなしき女、戸を開けてぞ出でたりける。常葉を見て、世に怪しげにうちまもり、「いかにや、かひがひしき人をも召し具せて、幼き人々を具し参らせて、この雪にいくへとおはしますぞ」と申せば、常葉、「さればこそ。夫のうき心を見せしかば、恨めしさの余りに、子ども引き具して出でたれども、雪さへ降りて道を踏み違へてよ」とて、しをしをとしたる気色にて、心ばかりは紛らかさんと思はぬよしをすれども、涙は袖に余りけり。主、「さればこそ怪しかりつるが、いかさまにも、ただ人にてはおはしませじ。かかる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらむ。行方も知らぬ君の御ゆゑに、老い衰へたる下臈が六波羅(平家の拠点)へ召し出だされて、縄をも付き恥をも見て、命を失ふほどの目に遭ふとても、追ひ出だし奉るべきかは。この里の習ひ、誰か受け取り参らせん。野山にこそおはしまさんずらめ。これほど寒く耐へがたきに、明日までも、いかでか長らへさせ給ふべき。家こそ多けれ、門こそあまた有れ、思し召し寄る御事も、この世ならぬ御契りにてぞ候ふらん。見苦しけれども入らせ給へ」とて、急ぎ呼び入れ、新しき筵取り出だして敷かせ、焚き火して当て、饗応してぞ進めける。

語句

。あらまし(名)へう変動詞「有りの(未)に反実仮想の助動詞「まし」の付いた形から生じたと推定され、本来は「こうありたいという願いの意」

①計画 ②概略

。しな「品・級」(名)へ「しな」は本来、高低差のある地形をいう語で「信濃」などの「しな」もその意。そこから、序列・階層の高低・優劣を表すようになった。

①種類 ②地位・身分・家柄 ③品位・人柄

。おづ「怖」(動)「恐れる」のわがら、

。おとなし「大人し」(形) ①大人らしい・分別がある

②大人びている

。よに「世に」(副) ①実に非常に

②(下に打消の語を伴って)決して全然

。かひがひし「甲斐甲斐し」(形) ①効果がある・張り合がある

②頼もしい・しっかりしている ③勢いがある・きばむしい

。よし「由」(名) (本文では)そぶり、ようす、

。ただびと「直人・徒人」(名) ①神や仏などに対して「ふつうの人間、

②(天皇・貴族に対して)臣下

③(摂政・関白などに対して)一般の貴族

。しかるべし「然るべし」(連語) ①適当だ。ふさわしい、

②リップだ。すぐれている ③そうなる運命だ

。ゆるゑ「故」(名) (本文では)体言または用言の連体形に付いて

①うのためにへ順接的に原因・理由を表す

②くなのにへ逆接的に原因・理由を表す